

学生の授業理解のための試み

— 毎回の小テストに自由記載欄を設けた効果を考える —

林 真由美
森 本 美 佐

はじめに

近年情報手段が発達するにつれて、様々な手段を用いて多くの人とコミュニケーションが取れるようになった反面、直接人と関わって話をする事が苦手な若者が増えてきている。それは早い時期から看護師を目指して本学の進学コースに入学してきた学生も例外ではない。精神看護学の授業では対人関係やコミュニケーションの必要性を常に学生に説明し続けてきたが、特に授業中は自分から意見や質問を自ら発言してくる学生は殆どなく、自分の意志を表出するのが苦手な学生が多い。しかし個別に話してみると、疑問だけでなくいろいろな悩みを相談してくる学生も少なくない。

そこで少しでも学生自身の思いや理解度を表出できるよう考えた結果、その日の授業内容が理解できたかどうか、知識の確認を行なうために実施していた小テストに自由記載欄を作り、その日の授業で分からなかった事だけでなく、何でも良いから何かあれば書くように説明し配布した。その結果、授業内容についての質問だけでなく、学生自身が抱えている悩みや最近あった出来事など、さまざまな事を学生は書いてくるようになった。そしてそれらの内容に教員が返答していく事によって、学生の授業理解の手助けになっただけでなく、学生が自らの悩みを解決するのに役立ち、授業に興味を抱くきっかけになるなど、授業を行なっていく上で参考になったのでここに報告する。

I. 試みの経過

精神看護学の授業では1単元が終わるごとに、その授業内容をきちんと理解できているかどうか学生自身にも知識の確認をしてもらうため、授業の最後に小テストを実施していた。そこで小テストを解答後、余った小テストの解説後の時間を利用して小テストの一番下に設けた自由記載欄に、その日の授業での疑問点や、またそれ以外の事でも何かあれば何でも書いて良いと説明した。記入時間は学生の様子を見ながらその都度調整していったが、小テストの解答時間を合わせておよそ10分から15分の時間を要した。学生は毎回思い思いの事を書いて授業終了後に提出し、それに対し教員は次の授業の時にどのような内容に対しても学生が書いた内容全てに教員が返答をし、学生に返却していった。

II. 研究方法

授業毎にした小テストを前期試験終了後回収し、学生が小テスト毎に自由記入欄に書いた内容をKJ法で分析した。今年度の精神看護学方法論Ⅱでは演習をした時などは演習についてのレポートなどを提

出したり、1単元の内容が2回にわたって授業をした事もあったため、夏期休暇前の前期試験までに小テストを実施した回数は6回であった。

またそれらの小テストの自由記入欄についてのアンケートと授業についての評価を本学衛生看護学科の精神看護学方法論Ⅱを履修しているⅡ回生74名に、全ての授業が終了した7月中旬の授業終了後実施しその場で回収した。(回収率100%)

アンケートの内容は、自由記載欄の活用度及びメリット、そして教員のコメントの適性であった。授業に対する評価は、授業に対する興味、内容の理解度及び授業全体の総合評価を5段階評価(5:非常に良い・そう思う、4:良い・ややそう思う、3:普通・どちらともいえない、2:あまり良くない・あまりそう思わない、1:良くない・全くそう思わない)で評価してもらった。

Ⅲ. 結果

1. 自由記載欄の内容

74名中61名(82.4%)が一度は自由記載欄に何かを書いており、総件数は222件であった。全く一度も何も記入しなかった学生は13名(17.6%)であった。その理由について訊くと、「小テストを解くのに精一杯で時間が無かった」と答えた1名を除いて、残りの12名全員は「質問する事が無かったから」と答えていた。

次に学生が自由記入欄に書いた意見をみると、授業内容についての質問はわずか15件であった。一番質問が多かったのはSSTや作業療法などの講義をした時に5件の質問があり、それ以外は毎回1・2件の質問があった。また1名の学生から4件の質問が寄せられた以外は個別の質問が寄せられていた。

自由記載欄に書かれた内容で一番多かったのが授業についての感想であった。そして二番目に多かったのが日々の生活の愚痴や、つぶやきであり、その次に多かったのが精神看護学実習についての不安や自分自身もしくは家族や友人の精神的な悩みであった。それ以外では少数ではあるが、自分の身の回りに起こった最近の出来事や進路についての事、またはその日の教員を観察しての感想などであった。

またそれぞれの内容について詳しく見ていくと、授業についての感想は、ただ「良く分かった」というような理解できたかどうかだけでなく、「精神科での鍵の重要性が分かったので、実習に行ってもきちんと管理しなければならないと思った。」など、授業で習った事を自分が実習に行ったらどう活用できるのかという事と照らし合わせた意見が多く見られた。

自分自身や家族・友人の精神的なことや悩みについては、うつ状態の患者の看護ならうつに関連した相談が、摂食障害の患者の看護なら摂食障害についての相談というように、それぞれの単元に関連した相談が多くみられた。また精神看護学実習についての不安は、「自分が実習に行った時に、授業で習った事をちゃんと実践できるか不安」というような内容であった。

日々の生活に関する愚痴やつぶやきは「最近体調がすぐれない」「しんどい」「やる気が起きない」など体調不良や意欲の低下に関する言葉が多く見られた。

最近の出来事に関しては、「彼氏とうまくいってて楽しい」「今こんなゲームをしている」など、自分

自身の身の回りに起こった出来事が書かれていた。

進路については「将来精神科に勤務したい」というものから「編入を考えているか何か情報はありますか」といった進路相談があった。また教員のその日の服装や髪型については学生なりの感想や批評が書かれていた。

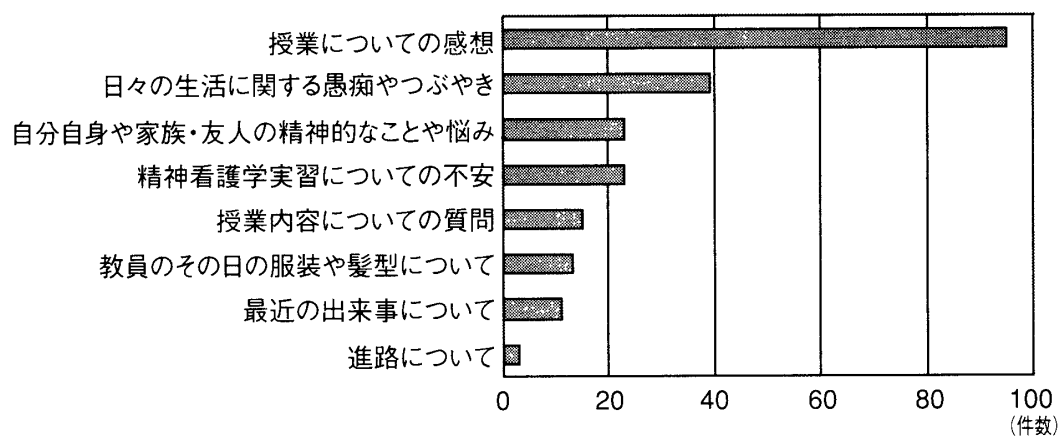


図1 学生が自由記載欄に書いた内容件数

2. アンケート結果

次に自由記載欄についてのアンケート結果を見ていくと、自由記載欄に学生が書いたコメントに対する教員のコメントは適切だったかという質問については、自由記載欄に記入した事のある学生59名全員が適切だったと答え、質問をする事により疑問は解消されたかという問いについても全員が解消されたと答えている。

自由記載欄があることによってどのようなメリットがあったかについては複数回答で、「教員に親近感が湧いた」と答えた学生が一番多く、ついで「文章でなら質問しやすかった」「精神看護学の授業に興味を湧いた」「精神看護学の授業という事で精神的な悩みなどを話しやすかった」「教員とのコミュニケーションがうまく図れた」などの意見が聞かれた。またその他は、「適切なアドバイスをもらう事により冷静に自分自身を見直すことが出来、それによって安心感と自分がいる意義のような事を考えられた」「一人の生徒として先生と話せた気がしてやる気が出た」「文章なので思っていることが素直に書けた」「聞きに行くのが面倒」「つぶやきにも返答してくれ先生と会話しているようだった」「精神科での勤務経験があるので質問しやすかった」という意見が各1名ずつあった。

また精神看護学方法論Ⅱの授業評価を5段階評価で学生に評価してもらったところ、授業に興味を持てたかという質問に対しては全体平均で4.6という評価が得られた。また授業の内容は理解できたかどうかについては4.0、授業全体の総合評価は4.6であった。

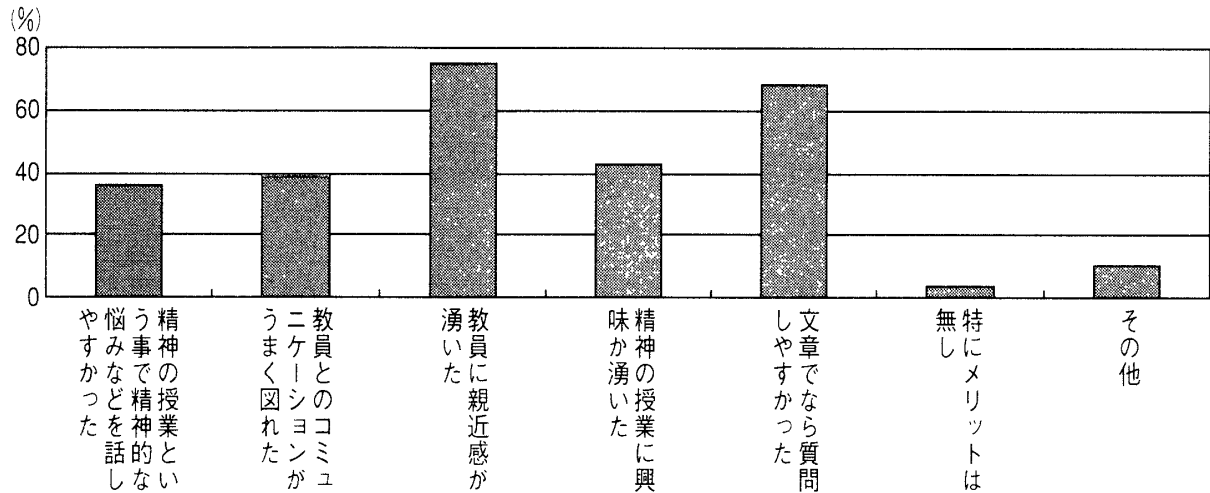


図2 自由記載欄があることによってどんなメリットがあったか

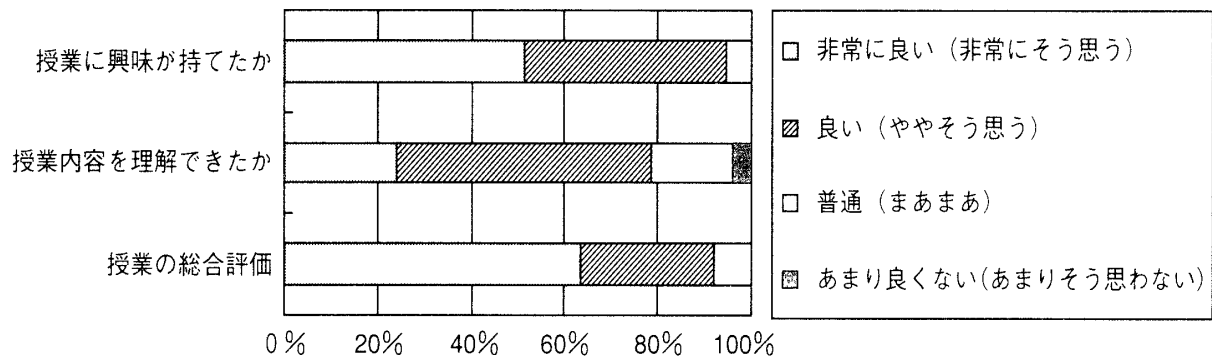


図3 精神看護学方法論Ⅱに対する学生の授業評価

Ⅲ. 考察

1. 学生への影響と動機づけ

自由記載欄を最初に設けたきっかけは、授業中質問や反応の無い学生が多く、学生がどのように授業を受け止めているのか、また理解出来ているのかが把握しにくかったためである。そのために学生が自らの疑問や思いを気軽に表出できる場が必要であると考えた。しかし改めて質問用紙を作ると学生が不必要に構えてしまい、質問は書くかもしれないが、授業に対してどのように思っているのかなど、素直な反応が得られないかもしれないと思い、毎回授業の終わりに実施している小テストを活用出来るように考えた。そして学生があまり意識せずどんな些細な事でも聞けるよう、また周りの目を気にして書かない事がないように質問以外感想でもつぶやきでも何でも書いてよいと毎回説明した。その結果1回目から学生は特に構えずに思い思いの事を書いてくるようになった。しかし1回も全く何も記入しなかった学生がいたが、最終のアンケートで「質問する事が無かったから」と何も記入しなかった学生13名中12名が答えており、「時間が無かった」と答えた学生は1名であった。自由記載欄に記入する時間は小テストを解答して余った時間だけでなく、小テストを解説後にも解説で分からないことがあった時に質問できるよう、記入する時間を設けていたのだが、学生によってはさらに十分質問する内容について考

える時間が必要だったと考える。質問の無かった学生の授業内容理解度の自己評価は5段階評価で4か5であったが、小テストの結果や、精神看護学方法論Ⅱの試験でも全員が良い成績ではなかった。そのため質問の無かった学生が本当に全て理解しているわけでは無く、何を質問して良いのか分からなかった学生もいるのではないかと思われる。

自由記載欄を作る事により、少数ではあるが、「境界性人格障害の人はちゃんと社会生活に適應できるのですか。」「うつ病の人は病状が悪い時に起こした行動を病状が良くなると覚えてないと聞いたのですが本当ですか。」などの疑問が寄せられた。このように学生が疑問に思った事を記入してもらう事によって、どのような事で学生が疑問を抱きやすいのか把握することが出来た。そして質問されたコメントに返答するだけでなく、次の授業で他の学生にも説明することにより、学生全体の理解を深める事につながった。

自由記載欄の内容については感想を書いている者が一番多かったが、それによって今まで反応があまり無かった学生が実際に授業を聞いてどう思っているのか毎回確認することが出来た。そして感想もただ単に「良く分かった」などという簡単な感想ではなくて、殆どの学生が9月から始まる実習について関連づけて書いている者が多く、そこから関連して実習に関する質問をしてきた学生もいた事から、学生はただ授業内容を聞いているだけでは無く、授業と実習を関連づけて考えている事が分かった。

2. 思いを伝える方法としての評価

授業に関する質問だけでなく、学生の些細な愚痴やコメントにも毎回返答していった。中には毎回前回の続きの内容を書いてくる学生がいて交換日記のようになった学生もいた。その都度教員自身の実体験や近況も含めてコメントしていった。そのようにする事で学生は授業中には見られない教員の一面を見る事で教員に親近感を感じ、さらには授業にも興味を持つことにつながったと考える。また学生によっては自由記載欄を通して関わりを持つようになった事により、教員に話し掛けてくるようになった。学生が書いた悩みについては、その日に行なった授業に関連した精神的な悩みが多かったが、私は授業中常に、精神疾患は特別なものでは無く、誰にでもなりうる身近なものであるということを説明し、学生の殆どが抱えている精神科は「怖い」「暗い」というマイナスイメージを出来る限り払拭できるようマイナスイメージの事だけでなく、明るいイメージが持てるようないろいろな体験談などを説明していった。そのような事から学生自身も精神的な悩みを気構えず、気軽に相談出来たのではないかと考える。

アンケート結果で、「適切なアドバイスをもらう事により冷静に自分自身を見直すことが出来、それによって安心感と自分がいる意義のような事を考えられた」という学生がいたが、青年期は、心身ともに急激な変化を遂げ、身体的には第2次性徴が始まり、精神的には自我同一性の獲得を課題とする時期であり、社会的にも家族から離れて社会に出ていく過渡期に当たる。しかし、身体的変化に精神的な変化がついていけず、しばしばささいなことで精神的に不安定になるため見た目には多くの友人を持って特に問題なく過ごしているかのように見える学生でも何らかの悩みを抱えている事が多い。しかし核家族化が進み、対人関係が希薄化し、人との直接的な関わりが減少してきている現代では学生自ら相談できる相手を見つけられないといえる。福沢ら¹⁾も、「現代の看護学生は同性の友人を数多く持つ

ているが、心の中まで踏み込むような深い関係は無く、一緒にいる事を楽しんだり、浅く広い関係を持つ傾向が浮かび上がった。」と述べているように、今までは身近な存在である友人が良き相談相手となっていたが、最近では友人にさえ相談出来ない学生も多くいる。また本学は進学過程であるが、学生の中にははっきりした希望や進路を見出せないまま入学してきた学生も多い。そして話をしてみると身体的な訴えをする学生の殆どが、明確な目的意識を持たずに入学してきた学生であることから、精神的な問題をうまく表現できずに何らかの身体の不調で訴えていると思われる。学生の中には一人でさまざまな悩みを抱え、その結果在籍途中で休学や退学していく者も少なくは無い。このため自ら相談に来る学生だけでは無く、どの学生も同じように何らかの悩みを持っていると考えて常に関わっていく必要があると思われる。

以上のような事から今回学生に対して改めて悩みを聞くのでは無く、自由記入欄を作った事で学生はあまり構えずに自由に不安や悩みなど少しでも自分の思いを表出するきっかけになったと思われる。従って自由記載欄などを活用して学生と交流を図り、早期に対応する事により、一人で不安や悩みを抱えている学生の助けになり、学生自らが解決の糸口を見つける事になるといえる。また教員も直接的なかわりが少なくてもこのような機会を通して学生にかかわることで早い時期から学生の変化に気づきフォローができると考える。

3. 精神看護学担当の教員に求められるもの

今回の自由記載欄の記入内容などから、学生は精神看護学の教員に対して、精神看護に関する知識だけでなく、精神看護の知識を有する者としてのカウンセリング的な役割も求められているといえる。そのため常に学生の状態を心身両面から把握し、訴えに耳を傾け支援していく事が求められる。また学生が自分の思いを表出しやすいよう常に自己啓発に努め、学生が言いやすいような雰囲気作りや方法を提供していく事が必要であると考ええる。

おわりに

今回自由記載欄を設けて学生の様々な意見を分析する事により、学生はたとえ授業中反応が無いような学生でも自分なりに授業を聞いて何かを感じ取り考えている事が分かった。また学生はさまざまな悩みを抱えており、それを表出できるような環境作りが必要であるという事を認識して常に教員は学生に関わっていく必要があると考ええる。

引用・参考文献

- 1 福沢節子 主体性を高める教育の方法を考える—現代学生の特徴から—, 294-297, 日本看護学会集録第21回看護教育, 1990
- 2 大森和子他 青年期にある看護学生の自己受容性と対人態度の関係性 189-191, 日本看護学会集録第33回看護教育, 2002

- 3 喜田裕子他 学生相談から見た大学生のメンタルヘルスと心の教育—富山国際大学における過去10年間のUPI調査をもとに— 富山国際大学人文社会学部紀要, 155-166, 2001
- 4 石野レイ子 看護教育における授業評価の検討, 看護教育, 医学書院, 320-324, 42(4), 2001
- 5 伊東志乃他 看護学生の健康状態と学校生活との関連, 91-93, 日本看護学会集録第29回看護教育1998